

〔巻頭言〕

家族看護学を今こそ広めましょう！

日本家族看護学会副理事長

池田 真理

2024年の始まりに日本は地震を体験しました。年始の家族団らん中の方も多かったと思います。最大震度7の大地震は、能登半島周辺を中心に、石川県・富山県・新潟県・山形県などに大きな被害をもたらしました。お亡くなりになられた方とご家族に謹んでお悔やみ申し上げますと共に、被災された皆さまにお見舞い申し上げます。そして、今なお、よりケアの必要な高齢者や子どもたちや健康問題をもつ家族員を心配し懸命に世話をしているご家族の皆さまに、エールを送りたいと思います。

さて、2023年中に開催された、記念すべき第30回日本家族看護学会のテーマは「Dyadic Approach」と「もうひとつのいえづくり」でした。私はこのDyadic Approachのテーマでシンポジウムを企画させていただきました。この“夫婦”や“親子（父子・母子）”といった一对の家族員（家族サブシステムの最小単位）に焦点を当てるアプローチによる研究は、家族の理解を立体的にし、結果として、家族の中の複数員にアプローチする家族看護学の実践に活かせるのではないかと考えます。一人ではなく複数員の関係性に目を向けることが家族の強みの発見にもつながります。「あうんの呼吸」や「甘え」などで人間関係が緩くつながっていたところに、戦後、西洋文化である、個人主義が入ってきました。しかし日本には徹底した個人主義は根付いていなくて、人との関係性を重視しているのはずっと続いていると私は考えています。メアリー・ホワイト氏は、自分自身と「大切な誰か」のために自己決定できる人間のことを「新個人主義者」と呼んでいます。どのようなライフスタイルを好み、どうやって自分にとって大事な人と関係を発展させるか、あるいは維持するかは人の幸福に影響します。家族が大きなライフイベントに遭遇し、心が揺さぶられるような、いままでの生活に変更を余儀なくされるといった経験をしたとき、家族のメンバーはどのように受けとめるのか、家族同士がその事象の受けとめ方の違いに気づき、本来の

機能を取り戻すために家族看護は何ができるのか、真剣に考えていく必要があります。家族を幸せにしたいと考えるのが家族看護学だと私は考えています。福山雅治さんが歌う「家族になろうよ」の歌詞の中で私の好きな次のフレーズがあります。

「どれほど深く信じ合っても わからないこともあるでしょう その孤独と寄り添い生きることが「愛する」ということかもしれないから…（中略）どんなことも越えてゆける 家族になろうよ」

いくら家族でも何でも分かり合えるわけではありません。でもそのずれがあっても努力し、それを支える周りの人がいるから生きていけると思うのです。

新理事体制になって1タームが過ぎようとしています。これまでの事業基盤を強固なものとして、今後の家族看護の行方を推進するために、今期将来構想委員会では、「家族看護学会のグランドデザイン（仮）」の策定に取り組んでいます。こちらも皆様にご意見をいただけるフェーズに近づいています。家族看護の実践、研究、教育をキーワードに様々な委員会で活動推進をしていきながらもこれからは、市民の皆様が家族看護学の役割や効果を分かっただき、市民から「We deserve family nurses!」と私たちの存在を認識し、要望してほしいと思います。そのためには看護実践の可視化と研究成果の発信をますます進めていきましょう。困難のただ中で一緒に家族のことを考えてくれる人、そして皮膚感のあるケアをしてくれる人として、家族看護の実践をますます広げていきたいと思うのです。

家族の課題はグローバル。世界中に家族はいて、国際的なアカデミー組織としては、International Family Nursing Association (IFNA) があります。日本家族看護学会の現理事、会員の方も役員として、或いは様々な委員会の活動に積極的に参加しています。2025年はオーストラリアのパーズで学術集会在開催予定です。世界ともつながって家族看護を発展させていきたいと考えています。